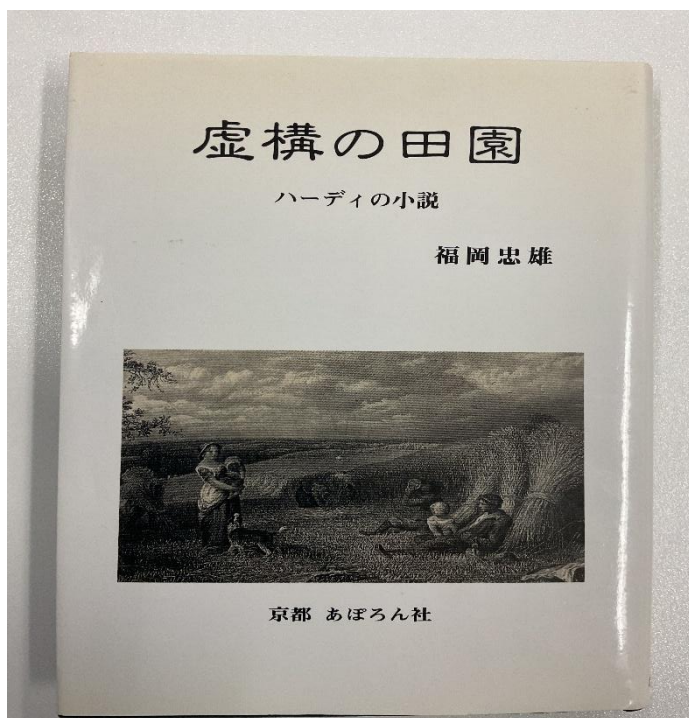


日本ハーディ協会ニュース
NEWS from THE THOMAS HARDY
SOCIETY OF JAPAN



第 97 号 (2025 年 4 月 1 日号)

発行者 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町 1-25 名古屋学院大学外国語学部西村美保研究室内
日本ハーディ協会 jimmu.thsjapan@gmail.com
編集者 山内政樹 〒275-0023 習志野市芝園 2 - 1 - 2 千葉工業大学



(画像は編者による)

The Trumpet - Major における手紙文化

渡 千鶴子
(WATARI Chizuko)

SNS のリテラシーに注目が集まり、手紙文化は衰退しつつあるようだ。しかし、19 世紀小説では手紙は重要な位置を占めていて、ハーディも長編短編を問わず手紙を扱っている。このエッセイで

は、*The Trumpet-Major*における手紙に纏わる描出を追うことで、1840年ローランド・ヒルがpenny postを実施する前の手紙文化を垣間見たい。

ラヴデイは、郵便局長だった男から「あんた宛の手紙を郵便局で預かっている」と言われても、ボブからほんの2ヶ月前に手紙が届き、1ヶ月前にはジョン宛に届いたので、まさかボブからまたくるわけではないと思う(12章)。この描写から、手紙は郵便局止めであることと、手紙はそれほど頻繁にこないことがわかる。ジョンは局止めになっている手紙を取りに行き、中へ入り、料金を支払うと、封を切って手紙を読む(13章)。この行為から、差出人ではなくて受取人が料金を支払うことと、宛先である父以外でも開封していいこともわかる。当時実際にも、手紙は家族間で読まれていた。例えば、ウェイマスの話題で始まるジェイン・オースティンの手紙(1804年9月14日付)には、家族間で手紙を共有する習慣について書かれている。引用すると、「母は今、叔母から届いた手紙を読んでいます。あなた(姉のカサンドラ)が叔母に出した手紙を母が読んでいるのです。私があなたの立場だったら嫌です」と、オースティンは自分の見解を姉に述べている。作品の語り手が手紙は公的な意味のあるものだった(14章)と語ることから推測すると、身内だけでなく、もっと広い範囲でも手紙は共有されていたのだ。それゆえ、ラヴデイが、手紙を受け取ったというニュースは村中に行きわたり、村人たちが粉屋に集まってくる。彼女の中にガーランド夫人もいた。彼女は代筆ができる人物であり、印刷された言葉をわかりやすく説明できる人物だった(6章)。彼女が手紙を読む場面(14章)で、ラヴデイは、「文章を解説する」準備を整えており、「象形文字のような判読できない言葉の意味に出くわせば、その意味について夫人に説明してもらおう」と思っており、「やつの筆跡を判読するのに苦労するんだ。何が書いてあるのかわからないところがあるからな」と言っている。「象形文字のような言葉」とはどういう意味であろうか。*A Thomas Hardy Dictionary*に、「ナポレオンの象形文字を思わせる似顔絵」(序文と25章)は記載されているが、「象形文字のような言葉」はない。だが、ハーディと交流の深かったレズリー・スティーヴンが、評論集(1874-79)でユーモラスに、“some ladies, even in these days of penny postage, will fill a sheet of note-paper and proceed to cross their writing till the page becomes a chequer-work of unintelligible hieroglyphics.”(*Hours in a Library*)と言及しているのは興味深い。“chequer-work”は、先に触れたオースティンの手紙の書き方であり、“On the Western Circuit”には、これに似た描写(“Four sides were filled, and a few lines written across, after the fashion of former days”)がある。では、なぜ象形文字のようなわかりにくい筆跡を用いたのであろうか。それは郵便料金を抑えるためであったのだ。キャサリン・ゴールデンは次のように記している。19世紀初め、郵便料金はナポレオン戦争のインフレのために高くなっていたので、ミドルクラスやワーキングクラスの負担は重かった。ワーキングクラスの1日の賃金が飛んでしまうくらいに郵便料金は高額であった。料金は差出人と受取人の住居の距離と、手紙の便箋の枚数で決まった。それゆえ人々は便箋の枚数を1枚に抑えて、できるだけ多くの文字を書こうとした(*Posting It: The Victorian Revolution in Letter Writing* 2009)。その工夫の一つが、“to cross their writing till the page becomes a chequer-work of unintelligible hieroglyphics”であったのだ。簡単に言うと、1頁目に水平方向に書いた後、1頁目を90度回転させて、すでに書いた文字に直角に交差するように、行間に文字を書く方法である。それゆえ市松模様のように見えるのだろう。多くの人がこのような工夫をする一方で、郵便料金を免れるという恵まれた人たちがいた。彼らは署名さえすれば無料送達になるというfranking制度を利用できたのである。ボブがこの恩恵に浴する場面(34章)がある。憧れのハーディ艦長の〈ヴィクトリー号〉への乗船が認められたボブは、大海原へと出帆する。その後、彼からアン宛に届いた手紙には無料送達の署名があった。これ

までのボブの何通かの手紙に *franking* 制度を利用できる人の署名はなかったが、船上からの手紙は以前の手紙と違っていた。まるで今後の彼の未来が意気揚々としたものであることを予測させるような描写である。

作品に描かれた手紙の描写は主要作品と比較すると極めて少ない。しかし、当時の郵便事情はすべての階級の人に平等ではなかったために、多くの人がさまざまな不便を感じていたことや、高い料金の困窮していたことが、この作品の庶民の日常生活にさりげなく記されているのである。

定年退職とハーディ研究

宮崎 隆義

(MIYAZAKI Takayoshi)

2020年3月末に、必然のことながら定年退職を迎えた。昔‘Jude’のように学問の都に憧れたが、事情も重なり地方の大学を出て地方の大学に職を得、平凡に教員生活を終えた。勤め始めた頃は、都会も知らないのに *Far from the Madding Crowd* とばかりに、自然に恵まれ、人々も学生も素朴で人懐っこい土地柄、例えば‘Mellstock’のようなところかと気に入ったが、入り込んでみるとそうはゆかないものらしい。ハーディの *Dynasts* のイメージには遠いが、小さな‘Dynast’たちはどこにでもいるもので、大学にだって学内政治にうごめいている。勤務地に、自然豊かな *Under the Greenwood Tree* か *Woodlanders* の牧歌的な世界を思い描いていたが、若い人たちの気持ちは‘Fancy’や‘Eustacia’のように都会に向いている。若者は都会に出ていくし、逆に都会のものが押し寄せてくる。素朴で堅実な‘Oak’や‘Winterborne’、‘Marty South’のような人たちもいたが、いつの時代も都会の雰囲気をかざす‘Fitzspiers’、あるいは‘Mrs. Charmond’のような虚飾をまとった人たちに惹かれるものらしい。

大学での英語の授業も大きく変わった。最初の頃はハーディ関係のテキストを学生たちと味わったが、実用英語重視となって、各種の検定試験に応じるよう求められるし、アンケートと授業改善に翻弄されている。さらには大学の執行部から教員の削減や配置転換をほのめかされて圧を加えられる。そこをうまくかわし、‘Mrs. Charmond’の付け髪のような新しそうに見える改革案を見せかけ、おかげで教員の採用人事は関連非関連含め両手に余るほど関わった。人事を尽くして天命を待つ。待っていたら定年退職だった。

国立大学が法人化になる前の古き良き時代、‘Mixer Lane’とまではいかないが、雑駁な自由があった。古いものと新しいものとのせめぎあい、ハーディの世界ならだが、法人化の波が一気に広がって新たな仕組みが浸透した。*Desperate Remedies* もないままに大学の体制は国に侵略され、運営交付金も年ごとに減らされ大学は貧しくなっている。‘John South’が木を切られると自分は死ぬと言ったが、大学の自由の気（木）は切られてしまい、管理体制強化の蔦のような枝葉が大学を覆い尽くしている。

ハーディは‘Dorset’の土地に‘Wessex’という古名を重ねて創作をした。「自然が芸術を模倣する」との逆説があるが、‘Dorset’の地がハーディの小説や詩の世界を模倣しているような錯覚を覚える。私たちが現実を把握するときには物語が大いに機能し、架空の世界を通して把握している。もちろん

んその物語は慎重に受け止めなければならないが、想像力を介したすぐれた小説や芸術は私たちに現実の根底に潜むものに目を開かせてくれるし、小説の登場人物たちを通して人間の本質を見つめることとなる。

このエッセイを書いている頃、アメリカに新たな‘Dynast’が就任した。ひとりの人間の存在が世界を揺るがす。ハーディの *Dynasts* では‘Napoleon’が中心となっているが、その姿にいろんな‘Dynast’たちが重なってくる。‘Spirit Sinister’は、疫病の流行、大火事、飢饉、大地震などを引き起こしたと述べるが、過去の悲惨な戦争ばかりか、世界を覆い尽したコロナ禍、ロシアのウクライナ侵攻、ガザを巡る紛争、大地震や降雨、山火事などの大災害は今も容赦なく続いている。ハーディが眺めていた当時の世界、そして彼が興味を持ったナポレオンというひとりの人間とその世界、そうした世界と今の時代とにどれほどの違いがあるだろうか。ハーディの考え方に‘Evolutionary Meliorism’というものがあるけれども、人間は賢明に進化しているのだろうか。‘Drummer Hodge’は今も世界の至る所に見られるし、帰りを待ちわびる兵士の妻たちもいまだにいる。

ハーディの作品には、*Dynasts* に登場する‘Spirit of The Years’や他の精霊たちの高見の視点から、‘Drummer Hodge’のような無名の弱い人間に寄り添う眼差しが感じられる。‘Troy’は痛烈な悔恨の情に捕らわれて自分が捨てた‘Fanny Robin’の墓に花を添えるけれども、折からの激しい雨が教会の樋口から迸り落ちてその花を無惨にも流し去ってしまう。*Dynasts* の精霊たちが交わすやり取りを考えてみるに、人間が作った宗教、神の不在、人間の意図、望みや希望、不条理や絶望など、すべてが集約されたような場面にも思える。‘Dynast’になりながらも運命に翻弄されて凋落し、自らに「否定」を課して無名の存在となろうとする‘Henchard’の哀れながらも気高い姿は、‘Drummer Hodge’にも重なる。だが、無に等しい存在であっても‘Napoleon’と同じくひとりの存在なのである。ハーディの目はそこに寄り添っている。そうしたハーディのスケールの大きな眼差しは、上質なユーモアにも行き届いていて懐が深い。

定年退職を迎え、研究機関に属さないで研究を続けるのは大変だということを痛感しているが、本来の作品を楽しむということに変わりつつある。ハーディの作品は研究の資料ではなく、読者が作者ハーディと、時間も空間も言葉や文化も超えて向き合える場であらうと思う。同時代や後年の多くの詩人や小説家たちに、時代や国境を超えて影響を及ぼしているハーディという良質な芸術家のひとりに会えたことは幸いだったかなと振り返っても納得できる今日この頃である。

福岡先生を偲んで

高橋 路子

(TAKAHASHI Michiko)

福岡忠雄先生と初めてお会いしたのは私が大学院の博士前期課程の学生だった頃です。大学院の授業では作家研究というより批評理論を学び、文学研究を進める上での方法論を中心に学びました。フーコー、バルト、ヤコブソンなどの難解な論文を沢山読みました。レポートが大変だったのを今でも覚えています。構造主義、ポスト構造主義など本当に分かりやすく解説してくださって、先生の授業は聴講生も大勢集まり、常に人気でした。

先生が常に仰っておられたのは、難解な批評用語を並べるのではなく、常に分かりやすく reader-friendly な論文を書くようにということでした。君の文章は枝葉が多すぎて結局何が言いたいのかわからない、とよく言われたものです。作家にはそれぞれ「気質」というものがあるが、自分が研究する作家の「気質」と波長が合わなければ研究するのは難しい、とも仰っておられました。また、これは先生がご著書の中でも書かれていることですが、作品には常に複数の読みの可能性があり、それこそが文学研究の醍醐味である、と。一つの正しい読みというものがあるわけではない、というスタンスは先生の論文指導においてもそうで、先生は決してご自身の考えを押し付けることはなさいませんでした。厳しいコメントも沢山頂戴しましたが、必ずフィードバックをしてくださり、厳しさの中にも温かい眼差しが感じられました。あらゆる意味において、とても寛容で懐の深い先生でした。そのような先生のもとで学ぶことができたことは私にとってこの上なく幸運なことでした。

修士課程を終えた後、進路のことで少し迷う時期がありました。十九世紀英文学研究会に声をかけて下さったのはちょうどそんな頃でした。この研究会は那須雅吾先生、故大榎茂行先生、高橋和子氏、西村寛子先生、北脇徳子先生が昭和六十一年に始められた歴史ある会で、那須先生の後任として福岡先生が代表を務めておられました。会員にハーディ研究者が多くいらしたということもあり、私も研究会を通してハーディの作品を少しずつ読む機会が与えられました。研究会では定期的にハーディの作品論集を出版してきましたが、一つの作品をさまざまな角度から読むというスタンスはまさに福岡先生が教えてくださった通りで、いつも多くの学びがあります。研究会の後には四条河原町のミュンヘンでワイワイとお食事するのが恒例で、ビールのジョッキを片手に福岡先生がいつも陽気に場を盛り上げてくださっていたのが今になっては懐かしく、少し寂しく複雑な気持ちになります。

私がハーディ協会に入会したのは、就職が決まってからのことでしたが、四年前に協会の事務局長を引き受けることになった際、背中を押してくださったのも福岡先生でした。これまで三十年近くの間、ずっと支えてくださった先生には本当に感謝の言葉しかありません。

今、曲がりなりにもハーディの作品と向き合いながら、福岡先生だったらどう論じられるかしらと思ひながら、論文を書いています。時間にゆとりができれば、先生がハーディ作品のなかで一番好きだと仰っておられた『町長』をもう一度ゆっくり読んでみたいと思います。

福岡先生のご冥福を心よりお祈りしています。

恩師との思いで

山内 政樹

(YAMAUCHI Masaki)

出会いは四半世紀以上前になります。福岡忠雄先生が滋賀大学から関西学院大学文学部英文学科に赴任されたのは 1998 年の春でした。その年、私はなんとか大学 3 回生となり、先生が関西学院大学で初めて担当されるゼミの第一期生となりました。当時の私は決して褒められた学生ではなく、中高の教員免許を取るためだけに大学に進学したので、英文学に全く興味はありませんでした。英

文学部の学生として、積極的に文学に触れることもなく、講義とレポートで課せられた Oscar Wilde の *The Picture of Dorian Grey* と Robert Louis Stevenson の *The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde* を和訳で読んだだけでした。福岡先生のゼミは Thomas Hardy の *Tess of the d'Urbervilles* (『テス』) を研究対象にされていましたが、実際に小説を読むのではなく、Tony Tanner の論文 “Colour and Movement in *Tess of the d'Urbervilles*” を分析対象にされてきました。その論文は、『テス』の中で描かれる「赤い色彩」が主人公のテスを悲劇的結果に向かわせる象徴的な役割を果たしているという内容だったと記憶しています。物語冒頭のテスの赤いリボンから始まり、深紅の唇、愛馬プリンスの流す夥しい血、フリントコム・アッシュ農場での赤塗りの動力脱穀機、白い天井に広がるアレクの血の染み、そして最後に彼女が横たわるストーンヘンジの祭壇に降り注ぐ赤い太陽光線など、「赤い色彩」が最初から最後まで彼女につきまとうという内容でした。当時の私はもちろん『テス』を読んだこともなく、ゼミが始まってしばらくそれを読むこともありませんでした。ただなんとなく Tanner の分析を面白く感じていただけで、文学作品の『テス』を面白く感じたわけではありませんでした。

ただ、ゼミでは学生の様子を見ながら福岡先生が時折挟む雑談が面白かったと記憶しています。私が強く記憶に残っているその一例を紹介します。テスとエンジェルの結婚が決裂に終わった場面の解説をされている時に、先生は突然、我々学生に「William Shakespeare の *Romeo and Juliet* の結末は悲劇だったと思うか？」と問いかけられました。物語を知っている学生（もちろん私はそのタイトルしか知らなかったので黙っていました）は、「主人公が最後に死ぬのだから悲劇だと思う」「お互い愛し合っているのに結ばれずに死ぬのは不幸」「親（一族）の都合で結婚できないのは悲しすぎる」など否定的な意見ばかり答えていました。そんな意見に対して先生は「あれはハッピーエンドなんだよ。最高に愛し合った状態でお互いに死を迎えることは。あのまま物語が進んで、もし二人が本当に結婚したら、それこそ悲しい結末が待っているかもしれないよ」と仰って、にやっと笑いながら、「おお、ロミオ、どうしてあなたはゴミ出しをしてくれないの？おお、ロミオ、どうしてあなたはお風呂を洗ってくれないの？と、結婚後はリアルな生活が二人を待っているかもしれない」と笑いを誘っておられました。そんな先生の話を聞いていると、なんとなく文学は面白そうな世界なのかもしれないと漫然と感じ、そのまま文学の世界に居続けることになりました。

大学院に進学し、先生のもとでハーディに取り組むことになりました。本格的な論文指導において、先生は毎回必ず私の拙論にフィードバックをしてくださり、時には優しく、時には厳しいコメントを多々いただきました。大学院に入っても私はやはり良い学生ではなかったようで、先生に拙論を読んでいただく度に、目じりにしわを寄せて「君はいつも言うことを聞かないね」と笑いながらいつもフィードバックをしてくださりました。ただ、私の拙論を否定するようなことは決してありませんでした。先生の懐の深さに私が一方的に甘えていたのかもしれませんが。そのような先生のもとで文学を好きになり、これまで続けてこられたことは私にとってこの上なく幸せなことでした。

私が就職して 10 年以上の月日が流れました。いくつか拙論を書いてきました。ただ、最後まで先生に手放しで褒められる論文を書けなかったことが心残りです。今後の研究生活で、先生がいつものように目じりにしわを寄せて、満面の笑みで褒めていただけるような論文を書くことが新たな目標の一つとなりました。

福岡先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

第 67 回大会印象記

丹野 海晴

(TANNO Kaisei)

日本ハーディ協会第 67 回大会は 2024 年 11 月 2 日(土)に西南学院大学中央キャンパスで開催された。はじめに庶務委員長の亀澤美由紀先生が開会の辞を述べられた。研究発表が続き、昼休憩の後、事務局長の高橋路子先生の司会のもと総会が行なわれた。午後はシンポジウムと特別講演があった。

研究発表は辻建一先生の司会で筆者が行なった。『恋の霊』と幻想の本質―「気質」と「描写」の統合的理解をめざして」と題した本発表では、『恋の霊』に見られる創作技法とハーディの創作意識を分析した。本作品は幻想的小説と見做されがちだが、リアリズムの境界線を引き直す先進的試みとしても読解し得ることを指摘した。その論拠として、幻想的印象を与える「恋の霊」は主人公ピアストンの心理的問題の責任を負わされたスケープ・ゴートとして理解できること、その深層にピアストンが抱える「存在基盤の欠如」というリアリズムの主題が潜んでいること、そしてこの自意識は極めて欺瞞的であり、ここからリアリズムに対してハーディが抱く自己批評的意識が読み取れることを挙げた。後付けになるが、ハーディ自身が考えるリアリズムは辞書的定義とは大きく異なり、カントの超越論的観念論が基盤となっているのではないかと考えている。

「ハーディと食」と題されたシンポジウムでは土屋結城先生が司会兼講師となり、今村紅子先生、福原俊平先生の三名の講師がハーディ作品と食の問題、あるいは表象について議論された。はじめに土屋先生が「小説と食」を結び付ける導入として「食」が人物の性格や場の状況を説明する手立てとなること、さらに 19 世紀イングランドの社会、歴史、政治の変化を調べるキーワードとなっていることを指摘し、本シンポジウムの意義を説明された。

土屋先生は続けて「蜂蜜酒の紐帯―“The Three Strangers”を中心に」というタイトルで発表された。短篇“The Three Strangers”に描かれる蜂蜜酒は共同体、そして個々人の心理的境界線を曖昧にする役割を持つことが主張された。“The Three Strangers”では蜂蜜酒を提供する(べき)か否かという判断基準は人物間の心の距離と重なる。羊飼いの家で行なわれる宴に訪れた罪人 Summers と死刑執行人の Hangman は対照的な人物であるが、意外なことに共通性があり、あたかも合わせ鏡であるかのような人物造形となっている。加えてテキストのセリフ部分がそれぞれ区別されておらず、ここから Summers と Hangman が混然一体となっているような印象を受ける。罪人の逃亡を告げる銃声が屋内の共同体に一度は亀裂を入れたが、二人の別れの場面では親密な握手が交わされており、さらにこのときまでに蜂蜜酒が飲み干されていることから、蜂蜜酒は共同体ばかりでなく真逆の人物間の“intimacy”をも形成する役割を持つ飲み物として描かれていると結論された。

次に今村先生が「The Mayor of Casterbridge を「食」から読み解く―小麦と穀物法」と題して発表された。小麦をめぐる食にかかわる文化的・歴史的要因がヘンチャードに破産をもたらす鍵となり、共同体の規範からの逸脱へと繋がることを考察された。歴史を循環するものと捉えていたハーディは小麦をめぐるヘンチャードとファーフレーのプロットを描くうえで神話やフォークロアを下敷きにしている。ヘンチャードの小麦の品質に問題があり、頭を悩ませていた時にファーフレーが現れ、小麦の品質改善によって町を救い、結果としてヘンチャードが町を去る流れはフレイザーの『金枝篇』の「王殺し」と重なる。さらにフルメンティ(小麦粥)はヘンチャードの栄枯盛衰を象徴する

「食」である。むすびとして、フルメンティ売りのスプーンをかき混ぜる動作は干草刈りヘンチャードが町長に出世し、没落する一連のサイクルを象徴していることを指摘された。

続いて福原先生が「*Jude the Obscure*における食材のシンボリズム—豚肉・酒・パン・卵」と題する発表をされた。本作品に描かれる食品には象徴的な意味が込められ、作中の対立構造を補強していることを中心に論じられた。豚殺しを正当化するアラベラー家のプラグマティズムと豚に共感するジュード、酒に精通し、他者の欲望を操るアラベラと酒に溺れ、欲望を操られるジュード、学問への執着を表し、ジュードの家を象徴するパンとアラベラー家を象徴する豚肉、そしてアラベラの性的魅力と生命力を象徴する卵と死を象徴するスーの茹で卵、さらには鳩の心臓を材料に作られる惚れ薬と競りにかけられるスーの鳩などが作中人物の対立構造の補強材として理解できることを示された。最終的に1つの食材の中に複数の立場や象徴的意味を見出すハーディの複眼的視点が見出せることを指摘され、シンボリズムを締めくくられた。

最後に金谷益道先生の司会のもと、桂山康司先生の特別講演「連形式による語りの可能性の追究：ハーディ詩における連(stanza)」が行なわれた。19世紀末から20世紀初頭にあつて、ハーディは「スタンザの創意工夫」こそが詩人として時代に要請された使命であると考えていた、ということが明朗快活かつ説得的に論じられた。桂山先生のご講演は近代英詩成立の背景に始まり、叙事詩と抒情詩の変遷、ヴィクトリア朝詩人の課題、そしてハーディが生み出した新たなスタンザ形式と進み、その議論の範疇は壮大だが丁寧に整理されており、聴衆を惹き込んだ。ハーディが詩“The Voice”で編み出した連形式は、詩行の殆どを“feminine ending”で構成するものだった。英詩の技法上、弱音節で終えることは好ましくないのだが、詩の内容と連形式を一致させるためのハーディの戦略がここに見られる。今までにない詩の味わいを生み出したハーディのスタンザ形式探究が評価され、ご講演がむすばれた。

全てのプログラムの終了後、金子幸男会長が閉会の辞を述べられた。荒天により予期せぬ事態が発生した中で、大会運営ならびに懇親会開催にご尽力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

事務局よりのお知らせ

会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月まで、年会費は4,000円（学生・大学院生は年1,000円）です。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいております。とくに役員の方にはご協力いただけますと幸いです。顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。なお、会費を3年間滞納なさいますと退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振替えください。会費納入用の振替用紙は、9月の『ハーディ研究』送付時にお送りいたします。

登録内容の変更について

勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更がありましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただきますようお願いいたします。

次回大会について（研究発表募集）

次期大会は、今年の 10 月 25 日（土）に、阪南大学あべのハルカスキャンパス（23 階）（〒545-6023 大阪市阿倍野区阿倍野筋 1-1-43 あべのハルカス 23 階）にて開催されます。研究発表にご応募の方は 4 月 30 日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は 600 字程度、英語で発表される場合は 150 語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は 25 分で、10 分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、原田範行先生（慶応義塾大学文学部英米文学専攻教授）です。2019 年 3 月まで東京女子大学現代教養学部長、教授（国際英語学科）でした。原田先生のご専門は近現代イギリス文学で特にサミュエル・ジョンソンを中心に、18 世紀の文学と文化について沢山の論文を執筆されていますが、出版文化史や比較文学・比較文化論、文学教育も研究対象として、幅広く精力的に活躍されています。大変興味深いお話を聴くことができると期待しております。

シンポジウムは、「若手研究者はハーディをどう読むか」（仮題）をテーマに、坂田薫子先生（日本女子大学教授）が中心になって準備を進めています。パネリストは坂田先生のほか、D・H・ロレンスを研究している加藤彩雪先生（大妻女子大学准教授）、イギリスのフォーク・リヴァイバルを研究している廣瀬絵美先生（順天堂大学助教）、ハーディの詩作品を研究している永盛明美先生（京都大学非常勤講師）です。内容等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

《内外ニュース》

会員による著訳書：

塩谷清人著、『『クラリッサ』を読む、時代を読む』（音羽書房鶴見書店、2024 年 9 月）

渡千鶴子編著『アン・ブロンテの研究ー世紀を超えて』（大阪教育図書、2024 年 12 月）

《編集後記》

協会ニュース第 97 号をお届けします。前任の金谷益道先生からの引継ぎでニュースの編集を担当することとなりました。よろしくお願い致します。冒頭の写真は、昨年ご逝去された福岡忠雄先生の研究書の写真です。先生はあまり仰々しいことを好まれなかった（私の思い違いかもしれませんが）ので、関西学院大学で直接ご指導を賜った高橋路子先生と私が追悼文を書かせていただきました。先生は学生との飲み会ではいつも早めに席を立ち、お金だけ渡して、「これからは大人の時間だから」と京都の町中に消えていきました。その哀愁漂う後姿を最近よく思い出します。先生がご逝去された年にこの編集の仕事をいただいたことに何か縁を感じています。先生からの最後の課題を与えられたようで、学生の頃を思い出します。

ご多忙の中、玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。次号は 2025 年 9 月発行予定で、投稿の締め切りは 2025 年 7 月 10 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご投稿ください。（編集者の責任で内容を編集する場

合があります。また、編集者と会長の判断で掲載できない場合があります。あらかじめご了承ください。写真を付ける場合は、被写体となった人物や撮影者等の掲載許可を得てからご投稿ください。著作権のある図版等については、あらかじめ掲載許諾の処理を済ませてからご投稿ください。) ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。

日本ハーディ協会ニュース 第 97 号

HP 公開日 2025 年 4 月 1 日

編集者 山内 政樹

(YAMAUCHI Masaki)
